



今回のマーシャル諸島・草の根 ODA に参加しました柴田政明です。マーシャル諸島には、風力発電、太陽光発電装置、計測装置を設置しにいきました。マーシャル諸島は、きれいな空気、きれいな夜空、自然が一杯でした。地元の方々からも歓迎していただきました。ASPAの方々とともに良い思い出が出来ました。少しマーシャルの雰囲気を書かせてもらいます。

飛行機から地球温暖化沈んでしまうとされているマーシャルの環礁が見えます。数十キロも続いています。海拔は2mくらいでところどころに椰子の木などがまだ残っています。

マーシャルの首都マジュロに到着して、悪天候で一日待たされましたが、小型風力発電機、太陽光発電機、その他の機材を、コンテナから車に、そして船に積み込んで、目指すティナック島に出発します。長さ10mくらいの1.5トンの船で、機材を全部積み込めるかと思うほどの小さな船でした。何とか積み込んで出発です。

海原に出るとますます張り切る松村キャプテンです。海のこと、ヨットのことなどを話して頂いて、少年のようなニコニコ顔は素敵でした。いつも細かいことを仕切ってくれる浜崎さんもおおはしゃぎ、日本にいるときと違うな？一番前はいつも冷静な上岡さんです。ASPAの中心メンバーはこうしてバランスを取っているのですね。とても良い感じでした。これから、マジュロを後に外洋に出ます。

船の先頭に乗っていますのは、今回現地でお世話になったエネルギー技師のティアンセンさん、その手前は麻生さん、右手が小松さん、一番手前が、みどりさん、水深3000mの外洋を航行中です。水の色は吸い込まれるような深い青色です。前日は、すごい嵐で船が前に進めなかったらしいです。水平線しか見えないところにいますと、私がこの海に落ちて、海にとっては何の存在感もないなって思いました。



途中の島で小休止。椰子の木陰で一服でした。こんな自然がまだあるんだなって感じたひとときでした。向こうに見えるのは環礁の反対側です。距離は 50km はあるかな？ということは直径 50 km の環礁ってということになります。その真ん中は結構深いんですよ。ですから、大型船が非難に来るんですよ。

またまた、外洋に向けて出発！同じような島がたくさんあります。映画に出てくるような無人島がたくさんありました。漂流したらあそこで生活できるかなってふと考えていました。ひょっとしたら、金髪の美人が漂流しているかもって、また、想像力豊かな自分に感心していました。

ティナック島に到着です。約 3 時間の船旅でした。現地の方々が出迎えに来てくれました。浅瀬なので、現地の方がサンゴ礁の合間をぬって、船を引いて誘導してくれました。岸まで 20m くらいまで接近してそこからはみんなでバケツリレーで機材運びました。機材運びは結構大変でした。岸まで運んでから、また、風力の設置場所まで 100m くらい手運びです。

いよいよ、風力、太陽光設置プロジェクトの開始です。これから、しばらくはキャンプ生活です。飲料水は少しは持っていきましたが、基本的には水は雨水です。校舎の屋根から取った雨水タンクから、小松さんが水浴び中です。前日まで嵐だったので、水はたくさんありました。工事は、先発隊が、基礎とタワーを設置していたので、私と麻生さんとはタワーの上に風力発電機と太陽光発電装置を設置します。

地元の方々からの歓迎を受けてたくさんのご馳走の差し入れでした。歌と踊りつきの大歓迎は嬉しかったです。椰子のみのジュース、パンのみ、ココナッツミルクで味付けした料理の数々、とても美味しかったです。先程まで足り回っていた鶏がいなくなったなって思えば、そのままの姿が食卓にのっていました。なんともいえない気分でしたが、ありがたく美味しく頂きました。人間とはこういうもんだとすぐに納得、順応性の高い自分にまた感心しました。



風力発電機、太陽光発電装置を、タワーの上に設置しました。あとは制御システムに接続です。それと同時に配線を学校と神父さん、校長先生の部屋にもつなぎますので、みんなで土木、配線工事です。子供たちも手伝ってくれて大助かりでした。完成前のタワーはもの干し竿にも活用？雨が降ってしけたシュラフは大変でした。



学校の屋根の向こうに風車が見えます。もう一がんばりで校舎に灯りがともります。



現地の子供たちです。みんなきれいな目をしていました。「椰子の木にのぼれる？」って聞いたら、「そんなの簡単だよ！」ってスイスイ登ってくれました。降りてきたら、今度は私に「登って見て！」って言われましたので、一瞬、躊躇しましたが、チャレンジしました。足がかりやすいように所々に切り目が入っているのですが、内股に力を入れなくてはいけなくて、5mほど登るのが精一杯でした。何とか子供たちに許してもらい降りてきた始末、「自分の体くらいは自由に動かせないと」と改めて感じた時間でした。



楽しい夕食です。美味しいスープ、カレー、なんと焼きとりまで、わがままな男性チームに美味しい料理をつくってくれた女性陣に感謝です。持っていったインスタントラーメン、カロリーメイトは手付かずでした。明日もしっかり働かねばと言いながら、夜遅くまでエネルギー飲料？（アルコールとも言う）を飲んでいました。ティナック島は「禁酒の島」なんです。



現地について四日目に風力、太陽光発電システムが完成しました。風力発電は最高出力600w×2機、太陽光パネルは55W×4枚のシステムです。これで、学校の教室の電灯と神父さん、校長先生の部屋、電動工具が、一台使用できます。あとは、風だけです。設置してからは、48時間、まわりっぱなしでした。



神父さん、校長先生、先生方、村の方々にお披露目です。親切に説明する私と麻生さんでした。浜崎さんが、細かいところは正確に通訳してくれて大助かり、左端のカメラマンは小松さん、その次に顔が見えるのが神父さん、一番手前が、技術をよく知っている先生です。



教室に電気が灯りました。一応、きちんと省エネ球を選定していきました。昼間ですが、電気のないところなので結構明るかったです。配線、配管は、黒住さんが、大活躍、玄人よりも、玄人らしい、素人でした。このあと、子供たちがなだれ込みました。



子供たちに電気のお披露目です。興味深そうに教室にはいる子供たちでした。しろいタオルを頭に巻いている黒住さん、昼間は本当に暑く、風がなければ仕事にならないです。雨が降るとみんな雨にあたってシャワー代わりです。お風呂はないですから、雨水で体をあろうか、海に入ったりして、そのままの生活です。用を足すのもトイレはひとつありますが、みんな海で、自然に帰していました。



完成した風車良いでしょう。小さな風車ですが、マーシャル諸島では、初めてなんです。今回は、風力、太陽光の実証データを取るために小型風力、太陽光発電システムを設置しました。また、三ヵ月後に、発電量、風況データを回収して今後の展開の基礎データにします。小型ですが、風がよく吹くところでは、集落にいくつかつくるほうが良いなって感じました。小型風車なら教えれば自分たちで直せますからね。



ティナック島を後に、マジユロに向かいます。この島ではたくさんの思い出が残りました。大きなシャコガイをとったり、竿は持っていきましたが、針がなく、釘から針を作ったり、空き缶を利用してルアーを作ったり、思わぬモノづくりを体験しました。みんなで潜った海もとてもきれいでした。朝方、岸のあたりを悠々と泳ぐマンタは、優雅でした。また、来ますね！

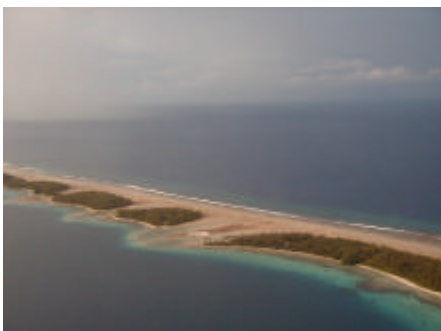
## 最後に



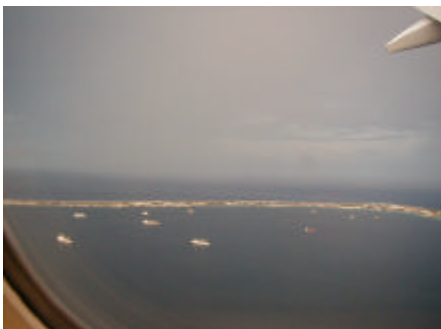
マジュロのホテルで食事



空港でのASPAメンバー



海岸線がきれい、でも、いつかは沈んでしまうのでしょうか？



マーシャルを後に

今回のマーシャル諸島は、すごく良い体験をさせていただきました。私は、日本では、環境・自然エネルギーの仕事をしています。マーシャル諸島は、地球温暖化で沈んでしまうとされている島です。しかし、現地の方々はそんなに気にしなく暮らしています。でも水位は少しずつ変化していきます。どうしたら良いのでしょうか？

マジュロでは、日本大使館の林大使さん達、マーシャルの資源・開発大臣シルクさん達と皆さんで最後の夕食をとりました。一緒に来られた次官のミューラーさんが、「今回のプロジェクトはとても小さなプロジェクトです。しかし、このプロジェクトは小さなプロジェクトですが、とても重要な、とても大きな意味のあるプロジェクトです。これから、未来に向けて、私達は自然エネルギーを推進していきます。」と言われました。日本の電力会社にレクチャーを受けていたウィルバーさんも、ASPAのメンバーが来るので一旦マジュロまで帰国してくれました。彼も「日本の電力会社は原子力を進めますが、私達は自然エネルギーを推進していきたい。」と話していました。シルク大臣は、これからは自然エネルギーで島々を自給しますと言われました。現在、ソーラーを使った島々の電化プロジェクトが進行中です。

経済大国日本は、自然エネルギーはペイしないと言っています。開発途上国・マーシャル諸島は、自然エネルギーを推進すると言っています。どちらが、本当に経済的なのでしょうか。

ティナックの方々はそんなに仕事をしていなかったようです。日本の方々は一生懸命に働いていますよね。人の仕事まで奪い取って仕事をする日本、ティナック島では、人の仕事までする人はいなかったです。人が困っていたり、頼まれれば、すっと手を貸してくれます。本当の経済って何でしょうか。そういえば、ティナック島は、一割くらいのドルしか使っていないそうです。後は物々交換だそうです。必要なときに助け合う。あとは自然の中でニコニコ暮らしているティナック島の人々が何か羨ましく思えた旅でした。